

目次

夜の家出	1
いびつな恋	1
吹き出したケチャップ	2

夜の家出

夜の 11 時なのに、スーパーの刺し身に割引シールが貼られないのはなんでか、ぼんやり見ている私の内側で、はつらんだそれからは今にも血が吹き出しそうだった。私はため息をこらえて。スーパーでスマホを握りしめながら叶わない思いを一緒に握っていることを、持て余している。

私は理解していた。ココから血は吹き出したりしないって。そう、このガンみたいな恋と勝手に読んでいるものには、ケチャップがたくさん詰まっている。私は、もう血液で自分を人間することをやめてしまったのだ。随分前になるけど。

人間だった頃の私には、きちんとした両親と、なんとなく好きでなんとなく結婚したきちんとした夫がいた。捨ててしまうのは実に簡単だった。別れさせ屋という人がいる。夫の浮気をでっち上げて、少し泣いて芝居して、上手いこと離婚ができた。それなりの慰謝料と、かわいそうがった両親からお金がもらえているので、私は好きに生きている。

いびつな恋

私が胸いっぱいケチャップを今にもこぼしそうな今夜、私が恋い焦がれている、ということにしているこの人は何をしているんだろうかと考えている。色が変わったスルメイカ、特売品刺し身用を前にして。

私は最後まで人間に愛着できない。なにせ顔のついているものが大嫌いなのだ。だから、現実と接するときは私を守ってくれる別の顔が必要になる。私はSNSの中でばかり生きることにした。リカ、とかエミ、とかサオ、とかいろんな名前を作っているいろんな人と恋を、しているつもり。これはこれで快適なので、私は大変気に入っている。

顔が見たくない。文字だけ見ていたい。そして感じのいい言葉を並べてくれる人がもしいたら、いともたやすく私はこころを捧げるのです。私がこころを上げると喜んでくれる人は割と居た。それはそれで、悪くない感覚だった。

吹き出したケチャップ

でも、悪いことが起こった。

私は自分が恋愛、を、しているつもりになっていることに、飽きてしまったのだ。なんとなく好きだった夫のことを思い出した。

顔が、無いといってもいくら特徴的でなかったから、なんとなく好きかつもりだった。夫だった人が、朝ごはんの卵焼き、卵焼きだと言っているのに、私の作り方がまずいのでいつもオムレツと勘違いした。そして、ケチャップとびちゃっとかけて、構わず食べた。舌の鈍い人で、キツイ味付けにしなくては食べることができないのだった。私は夫だった人と何を話したのか全く思い出すことができない。顔がなかったことしか思い出せない。なぜ、この、渴望の瞬間にもとの夫を思い出すのだろうか。



オムレツ

死にたいのだけ。

と私は考えている。たらたらたらたら、ガンの袋の中からケチャップがこぼれてくる。私は生きるのをやめた。なのに、ココに居てしまう。

誰か好きになって、しまおうと、してしまう。もう飽きたのに。幸せを感じたことは一度もなかった。あなたは恵まれて幸せね、と言われることはよくあったけど。でも、恵まれて幸せ、という文章も単語も私には理解できなかった。ひたすら退屈で、気持ち悪い顔がうようよしている世界で。どうして自分まで生きていかなくてはいけないのか、理不尽でたまらなかった。

でも死ぬことはできなかった。

私には生命が無い。かと言ってマシンでもない。スイッチを切ってしまうことができないのだ。動き続けるイラストみたいだと思った。実像を持たない影。

ねえ、別れましょ？

と私はメッセージを打つ。私と恋愛をしているらしいその人が、何を思って何をしているのか考えた。まさか、相手がケチャップでできたイラストだなんて、考えもしないだろうことを思った。

私は人を蔑ろにする。嘘をついて、気分を悪くさせる。そんなことしかできないから。好きとかきらいじゃなくて、できることしか、できないのだから。

ケチャップ

著 森本湧水

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
